

現代における「イスラーム」の語用論

— 入信体験の語りに見る動名詞的イスラームへの回帰

松山 洋平

東京外国語大学大学院総合国際学研究所・日本学術振興会特別研究員(DC)

要旨

本稿の目的は、現代において「イスラーム」という言葉の意味が、近代化以降支配的であった「固有名詞的」なものから「動名詞的」なものへと回帰していることを示す兆候を指摘することである。つまり、昨今において、制度的宗教あるいは体系化された教義としての「イスラーム」に代わり、個人的な「服従・帰依の経験、態度」としての「イスラーム」の使用頻度が高まりつつある。この傾向を示す顕著な事例のひとつに、改宗ムスリムによる「入信記」の語りの増加がある。彼らは、聖典テキストへのアクセス能力を持たず、「固有名詞的イスラーム」を語りえない一介の信徒に過ぎない。しかし彼らは、自らの入信の語りが異教徒に対して「真実＝イスラーム」を伝達すると信じている。それは、彼らが「イスラーム」という概念を、体系化された教えとしての固有名詞的なものではなく、個人的な体験の名称として認識していることを意味する。この現象は、信徒が「小さな物語」の中においてのみ自己の信仰を認知する、ポストモダン的な事象として認識することが可能である。

キーワード

イスラーム、オブジェクト化、入信、真理、小さな物語

I. はじめに

現代社会における宗教的言説の多元化と混乱は、世俗化論に対する宗教市場理論の仮説の有効性を証明した。すなわち、近代化以降、唯一の正統性を担う伝統的集団(キリスト教における教会、イスラームにおけるウラマーなど)の権威が失墜し、広く一般信徒にテキスト解釈の可能性が開かれることで、多種多様な宗教的言論が生み出される結果となった。

イスラームにおいても、このような「解釈の民主化」の傾向は著しい。Olivier Roy は、小冊子やインターネットなどの様々な媒体を通じ、専門家ではない一般のムスリムが「イスラームではこのように教えている (Islam says...)」と発言し、イスラームの「正統な」教えを代弁する事態を指摘している¹。このようにして供給される宗教的言論のそれぞれは、相互に矛盾する要素を含むのが常であり、多元的な言論空間を形成している。

しかしながら、「イスラームとは何か」を語る信徒各人の自覚的な意図は、かならずしも多型的 (polymorphic) なイスラームを提示することにあるわけではないだろう。彼ら個人は、「イスラームとは...」と語ることで、「唯一の真理 = イスラーム」を語っており、後述するように、彼らの多くが、自らの語りが異教徒への効果的なダアワ (布教) であると信じているのである。

本稿では、特に改宗ムスリムによる入信記の中で語られる「イスラーム」という言葉の現代的用法に焦点を当て、「イスラーム」に付与される意味が、近代化以降に支配的であった固有名詞的なものから動名詞的なそれへとシフトし始めていることを示す。

本稿の論点を先取りすれば以下の通りである。19世紀以前、ムスリムは「動名詞的イスラーム」と「固有名詞的イスラーム」の間の明確な区別を行わず、非分離的な形でそれを使用していた²。その後、近代におけるグローバル化と西洋化の進展に伴って、固有名詞的な意味での「イスラーム」の記述が促されるようになり、この使用法が定着した。しかし昨今において、「イスラーム」を動名詞的に語るムスリムの事例が拡大している。この傾向は、増加する改宗ムスリムによる入信体験の語りに顕著に表れている。彼らは体系的なイスラームの知識を持たない一介の信徒に過ぎないが、「わたしのイスラーム」(つまりそれは神と自分との個人的な繋がりであり、動名詞的イスラームである)を語ることで、「真理 = イスラーム」が異教徒に伝達され得ると信じている。ここに、「イスラーム」の用法の今日の特長として、「固有名詞的イスラームから動名詞的イスラームへの回帰」という現象を確認することができる。

以下、Ⅱにおいて「イスラーム」という言葉の持つ多義性を概観し、Ⅲで「固有名詞的イスラーム」と「動名詞的イスラーム」の相違と、その史的展開を説明する。Ⅳでは入信記の増加現象を取り上げ、「私のイスラーム」を語ることと「真実なるイスラーム」を語ることを同定する現代ムスリムのイスラーム認識を考察する。Ⅴでまとめを行う。

Ⅱ. 「イスラーム」の多義性

「イスラーム」という言葉は多義的である。参照するテキストをクルアーンと

スンナに限定した場合でも、少なくとも三つの異なるレベルで「イスラーム」という概念を捉えることが可能だ³。

第一に、語義である「帰依、服従、降伏」の意味で「イスラーム」という言葉が用いられる場合がある。クルアーンには以下のようにある。「砂漠のアラブたちは、「わたしたちは信仰します。」と言う。言ってやるがいい。「あなたがたは信じてはいない。ただ『わたしたちは服従しました(aslam-nā)』と言いなさい。」(第49章14節)⁴ この節では、内的な信仰を持たずに外面的に降伏しただけのベドウィン(アラビア遊牧民)の姿が描写され、彼らの行為が、「服従する(aslama)」という動詞によって表現されている。この動詞の動名詞形が「イスラーム(islām)」である。スンナ派の代表的な古典クルアーン注釈者であるアン＝ナサフィー(d. 1310)は、本節に登場する「イスラーム」の意味を、「信仰心の伴わない舌先の告白」であると解説している⁵。

第二に、一般的により知られた意味として、個別的な信仰体系(あるいは、誤解を恐れずにいえば、宗教的教団)としてのイスラームがある。クルアーンでは、「本当にアッラーの御許の教えは、イスラームである」(第3章19節)、「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである」(第5章3節)と述べられ、「イスラーム」という言葉が真正な宗教の名称として神に名指されている。

第三に、イスラームという宗教を「イーマーン(imān)」「イスラーム(islām)」「イフサーン(ihsān)」の三部門に分けた場合の「イスラーム」がある。この場合、イスラームとは「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの御使いであると証言し、サラート(礼拝)を行い、ザカート(喜捨)を供し、ラマダーン月には断食し、旅の資金に支障がない限り、アッラーの館(カーバ神殿)に巡礼すること」⁶を意味し、基本的信仰箇条を信仰することを意味する「イーマーン」、及び理想的な靈的態度を意味する「イフサーン」の部門と対比される。

Ⅲ. 「動名詞的イスラーム」と「固有名詞的イスラーム」

以下の議論では、上記の三つの「イスラーム」の内、第一と第二の意味における「イスラーム」を特に取り上げる。第一のイスラームは、純粹に各個人が行う行為・態度としての「服従」を意味する。この場合、「イスラーム(islām)」という言葉は、アラビア語の動詞「帰依する(aslama)」の動名詞(maṣḍar)であり、單純にその原意が意図される。イスラームの自己認識においては、「イスラーム」つまり神への帰依・服従は、預言者アダム以来、諸部族・諸民族に遣わされたあらゆる預言者が教示した宗教の名称である。各々の預言者は、その時代・地域

に適した独自の行為規範(シャリーア)を携えて神に遣わされたが、一方で信条の面においては、唯一神への絶対帰依という単一の教えを命じたとされる。本稿では、絶対帰依という神に対する人間の態度・経験を「動名詞的イスラーム」と呼ぶ。

これに対して、第二の意味におけるイスラームは、制度化・体系化された「宗旨(al-dīn)」としてのイスラームである⁷。あるいは、上記のような「純粋な帰依の態度=イスラームである」との認識を含んだ、ムスリムの信じる信仰箇条の総体、または宗教的知識の総体としての「イスラーム」である。本稿では、この意味での「イスラーム」を「固有名詞的イスラーム」と呼ぶことにする。

なお、「固有名詞的イスラーム」は、「外的視点から見たイスラーム」つまり「ムハンマドにもたらされた啓示に基づく実体宗教」のことではない。イスラームの内的な視点においても、ムハンマドに啓示された教えあるいは彼の信仰共同体を個別に指示する場合がある。「ムハンマドのウンマ(≒共同体)」、「ムハンマドのミッラ(≒教派)」、「ムハンマドのシャリーア(≒道、法)」などの表現がこれに当たる。しかし、筆者が定義した「動名詞的／固有名詞的」の差異は、預言者ムハンマドの前／後で規定されるものではなく、神へ帰依する個人的な態度か、宗教的知識・信条の総体を指すかの違いである。

「イスラーム」という言葉の意味認識を巡る問題において想起されるのが、大塚和夫の著作『イスラーム的』である⁸。大塚は、近代におけるイスラームの宗教言説の変化を追いながら、本質主義と相対主義の両視点をまたぎつつ、今日においてイスラームがどのように語られているのか、そして、研究者の立場からイスラームをどのように語る事が可能であるか、という問題系を論じている。この「本質主義的イスラーム／相対主義的イスラーム」という図式は、「真理」(あるいはそれに対立する「誤謬」)に対する態度に基づいて区別されるものである。一方、本稿で論じる「動名詞的／固有名詞的イスラーム」という二項は、そのような基準によった区分ではなく、認識の対象である「イスラーム」の理解、その内容の、質的な違いに基づいている。

この「動名詞的イスラーム」と「固有名詞的イスラーム」という二つのイスラームは、イスラームの最初期から明確に区分されていたわけではなかった。それは単純な理由による。イスラームの考え方では、神に対する人間の正しい態度は「服従」すること(つまり動名詞的イスラーム)であり、その「服従」を如何になすべきかを詳解し記述した体系が、「固有名詞的イスラーム」だからである。Cantwell Smithによれば、20世紀より前に「イスラーム」という言葉が明白に固有名詞的に使用された例は希少であり、13世紀の法学者イブン・タイミーヤ(Taqī al-Dīn Aḥmad bn Taymīyah, d. 1326)の著作名『イスラームにおける勸善懲悪(al-Hisbah fi

al-Islām)』に確認されるのみであるという⁹。このような背景から、「イスラーム」という言葉を一元的に解釈し、「動名詞的イスラーム」と「固有名詞的イスラーム」の間の区別を解消させようとする主張は、現在でも一部に根強く存在する¹⁰。

しかしながら、グローバル化された近代以降の社会においては、イスラームの固有名詞的な使用は、動名詞的なそれに比べより一般的である。ムスリムあるいは非ムスリムによって著される「イスラーム入門書」「イスラーム解説書」の類では、制度的宗教としての「イスラーム教」が解説されるのが常だ。今日の最も著名なウラマーのひとりであるユースフ・アル=カラダーウィー(Yūsuf al-Qaradāwī)は、『イスラームにおける許されたものと禁じられたもの(*al-Halāl wa al-Harām fī al-Islām*)』、『イスラームにおける国家学より(*Min Fiqh al-Dawlah fī al-Islām*)』、『イスラームにおける善行の基礎(*Usūl al-'Amal al-Khayrī fī al-Islām*)』などの著作を持つが、これらの書名からは、ひとつの体系的な「統体(entity)」としての「イスラーム」が前提とされているのがわかる。

固有名詞的イスラームの現代における台頭には、当然、西洋宗教学的な「宗教」の観念がイスラームにも適用されたことが背景として考えられる。しかし、より主要な原因は他に存在する。すなわち、近代においてムスリム諸国が西洋近代化されると同時に、西洋諸国においてムスリムの存在が可視化の度合いを強めることで、イスラーム的な諸制度は、西洋的法システム・世俗的政治システム・非イスラーム的地域文化との間に、物理的かつ直接的な邂逅を向かえた¹¹。その中でムスリムは、イスラームの「射程」「範囲」を確定するように迫られた。つまり、制度的なイスラームの記述が要求されたのである。それと同時に、ムスリム自身も鏡像効果的にそのようなイスラーム像を自身の遺産として取り入れたと考えられる。今日のムスリム社会では、あらゆる社会的局面において「イスラーム的(*islāmī, islāmīyah*)」という言葉が氾濫している。「イスラーム的経済」「イスラーム的教育」「イスラーム的家庭」など、その例は枚挙にいとまがない。つまりイスラームは、あらゆる機構をその射程に含む包括的全体システムとして想定され、社会の諸要素がそれによって予め規定されたものとみなされているのである。

Eickelman and Piscatori は、近代以降のムスリムが「私の宗教は何だろうか、それは私にとって何故重要なのだろうか、私の信仰は私をどのように導くのだろうか」と問い、宗教を「記述し、特徴づけし、他の信仰体系から区別する」過程を「イスラームのオブジェクト化(objectification of Islam)」と呼んだ¹²。この概念は、現代のムスリムが制度的な宗教として自身の信仰を捉え直そうとする傾向を言い表している。

上述のような固有名詞的イスラームの台頭は、今日においても継続している事態であることは確かだ。しかしながら以下では、昨今において、この流れに反し

て動名詞的なイスラーム理解が萌芽しつつあるという事実を、自らの入信記を語る改宗ムスリムの増加という現象を通して示すことにしたい。

IV. 入信記で語られる「動名詞的イスラーム」

1. わたしのイスラーム、真理なるイスラーム

現代において「イスラームとは何か」を語る主体の多数派は、宗教家でも研究者でもない、一般の信徒である。今や、昨日までムハンマドの名を知らなかった人物が、今日にはイスラームに入信し、明日には「いかにイスラームが素晴らしい宗教であるか」「なぜイスラームが唯一の真理であるか」を異教徒に説法することができる。

彼らは一体、何を「イスラーム」として語っているのだろうか。彼らの大部分は、聖典テキストへのアクセス能力を持たず、必要最低限の基礎的な神学的命題や、実践的な(イスラーム法的)知識も持ち合わせていない場合も多い¹³。つまり、彼らは「固有名詞的イスラーム」を語りえない存在である。

では、制度的宗教としてのイスラームを語る術を持たないこれらの信徒は、なぜ「イスラーム」を語り始めたのだろうか。私見によれば、それは彼らが客観化された制度的イスラームではなく、「自分たちのイスラーム」を語っているからだ。つまり彼らは、イスラームを諸部分から構成される統体としての固有名詞的な意味においてではなく、個人的な経験によって定義づけられる、より動名詞的な意味で用いているのである。

このことを示すひとつの事例が、改宗ムスリムによる入信体験の語りの世界的な増加である。

入信体験の語りは、世界中の様々な地域、様々なメディアの中に確認される。例えば Islam For Today.com というインターネット上のサイトには、主に欧州を中心とした多くの改宗者の入信記が掲載されている¹⁴。イスラームに縁遠い日本においても、日本人ムスリムが自分たちの入信の記録を纏めた出版物が複数存在する。ムスリム新聞社からは『私の入信記～イスラームの信仰に導かれるまで』(1997年)、宗教法人日本ムスリム協会・青年部からは『入信記』(2007年)などが出版され、一部地域では『道産子ムスリム入信記』(2009年)なるものも頒布されている。

このような活動には、いくつかの潜在的な動機が隠されている。彼らは、入信記を編纂することで、宗教的マイノリティとして生きる自分たちのアイデンティティの保持や、信徒(改宗者)同士の精神的紐帯の強化を意図しているのかもしれない。また、これらの活動の背後には、非ムスリム諸国に生活するボーン・ムスリムによる支援協力が存在するケースが多いが、彼らは、イスラーム的価値(と彼

らが考えるもの)が客観化されていない社会の中で、程度の差こそあれ、アイデンティティ・クライシスを迎えている。そこで、そのような非イスラーム的社会の中においてさえイスラームへと導かれた改宗者たちを集め、彼らを「鑑賞」することで、イスラームの真理性を再確認し、自分たちのアイデンティティ・クライシスを救済する手段として利用しているのかもしれない。

但し、想像されるこれらの動機・背景は、あくまでも潜在的なものである。顕在的なレベルに限って言えば、入信体験を語る当人たちの意図は、非ムスリムに対する「真理なるイスラーム」の伝道にある。つまり、以下に示すように、彼らは、「イスラーム」の多義性を認識した上で、その中から服従・帰依の経験、態度としてのイスラームを特化して語っているのではない。彼らは、自分たちが語る「動名詞的イスラーム」を、非ムスリムに伝達されうる「真理なるイスラーム」と同一のものと想定している。つまり、「イスラーム」を、一義的にそのようなものだと考えているのである。

この点を如実に例証する事象として、動画投稿サイトの Youtube に投稿された改宗ムスリムたちの動画を紹介したい。本サイトには、改宗ムスリムの入信記が多数投稿されている¹⁵。ある改宗日本人ムスリム女性は、イスラームへの入信に至るまでの自身の生活史や人生経験を熱心に語っている。そして、その語りの中で以下のように述べる。

わたしが今ここに、こうして話しているのは、このように苦しんでいる人たち、不安に思っている人たち、またわたしのように、探し求めている人たちに、教えてあげたいからです。¹⁶

一体、彼女は視聴者に何を教えようと言うのだろうか。つまり、彼女は「イスラーム」を教えることができるのだろうか。この新しいムスリムは、「私のイスラーム」、「私の帰依の体験」しか知らない。実際に、彼女がこのサイトで語っている内容は、自らの生活史に過ぎないのである。別の改宗日本人ムスリム女性もまた同サイト上で入信に至るまでの物語を語っているが、この動画には『日本人ムスリム女性による布教(Japanese Muslim Dakwa)』というタイトルが冠されている¹⁷。彼女もまた、体系化されたイスラームの知識については一切語らず、自身の人生経験と、ムスリムになる際の感想等々を語っている。

彼女らの態度や、動画に付されたタイトルからは、改宗ムスリムの生活史における改心体験の語りが他者に「真理＝イスラーム」を伝えることができると、彼女らあるいはその周囲のムスリムが考えていることを示している。

個人的な入信体験を語る事が、「真理なるイスラーム」の他者への伝達に直結するというこの認識は、「動名詞的イスラーム」の拡大を示すものである。今

日、このような改宗ムスリムによる入信記の執筆や出版活動の広まりは、世界中の地域のあらゆる言語において散見される。

以上で見たように、一般信徒による入信記の語りが増加していること、及びそれによって異教徒への布教が意図されていることは、今日の多くのムスリムが「イスラーム」を動名詞的な意味で捉え、個人個人の帰依・服従の経験、態度に、それ(真理=イスラーム)が発現していると考えていることを示している¹⁸。

2. 改宗動機の分析

ここで、「入信記」に記録された改宗の動機について考察することは、われわれの関心からみて有益な示唆を与えるだろう。

入信記とは、その定義からして、既に信徒となった人格によって過去遡及的に語られるものである。それは、今までに自分が体験したエピソードを取捨選択し、それらの意味を再編しつつ個人史を再構築することで、「真理」へと到達した自身の軌跡を描く行為である。それ故、そこで語られる入信の動機は、多分に自己の現在の信仰を正当化する営みに沿ったものであり、客観的な入信の心理的メカニズムを分析する類のものではない。しかし、だからこそ、入信記で語られる入信の動機は、彼／彼女が「イスラーム」という概念をどのように捉えているかという点を浮き彫りにするのである。

ここでは、日本ムスリム協会・青年部から発行されている『入信記』を対象に、執筆者たちのイスラーム観を探ってみたい¹⁹。

本稿の視座に基づいて問いを立てるならば、「彼らを選択した『イスラーム』は、固有名詞的なものか動名詞的なものか」と問わねばならないだろう。この問いに対して、『入信記』に収められた多くの入信記は、彼らが受け入れ信じたものが、制度的宗教、教義の体系の意味でのイスラームではなく、個人的な服従・帰依の経験、態度としてのイスラーム、すなわち、「動名詞的イスラーム」であることを示している。

まず、執筆者の多くの間に共通して確認される顕著な傾向として、その入信の直接的な動機が、極めて「感覚的」なものであったことが挙げられる。例えば、ある信徒が自分が信仰心を得るきっかけとして挙げているものは、「ムスリマ達の親切な対応、イスラームに対する真剣な眼差しや瞳の輝き」²⁰である。別の信徒は、入信の最終的なきっかけとしてクルアーン朗読を聞いた際の胎児の激しい胎動を挙げ、「その動きに圧倒された私は、夫に、ムスリマになることを告げた」²¹と語っている。さらに別の信徒は、中東のボーン・ムスリムの生活態度に感銘を受け、その神学的背景等を見ることなく、最終的にムスリムになる決断を下すに至る。彼は言う。「こんなに目が輝いていた人がいただろうか？幸せそうにいつ

も笑ってばかりいる人はいただろうか？私の価値観、世界観は完全に瓦解していった。ここに私の探し求めていた答えはあった。』²²

さらに、一人ならぬ執筆者が、入信に際してイスラームの「教義」へ無関心であったこと(あるいは、入信後も無関心であること)を自覚的に語っていることも特筆すべき点であろう。ある信徒は、「シャリーアなんかどうでもいい、そんなもの知ったことか、とりあえず入信してやる」²³と、入信の際の心持ちを告白している。別の信徒は、「イスラームこそが完璧な人生の指針であり道であると考えている」と、信者となった現在の自分の認識を語ると同時に、「今までイスラームの教義に触れて来なかったように、私にとって、教義の内容はさほど重要ではなかったと言える」²⁴とも断言する。またある信徒は、モスクに通い、そこで漠然とした「親近感」を感じることを通じて、「イスラム教に入信するのが良い」と考えるまでに至っている²⁵。

彼らにとってイスラームという宗教は、その教義内容の正当性によって真理性が査定され、世界の唯一の究極的意味体系として承認されるものではなく、自身の感覚的直感によって選択される生き方の「指針」²⁶なのである。

また彼らは決して、イスラームとの出会いを「それまでの人生にとって全く異質な世界観との衝突」としては理解していないし、自分たちの入信についても、「ある象徴的天蓋あるいは世界観から、それとは異なる別のそれへの転向」とは捉えていない。つまり、どちらかといえば日本人ムスリムの入信ケースの多くのは、「転換的回心」ではなく「強化的回心」に分類されるものであることが多い²⁷。彼らは、イスラームへと到達した自分の人生の軌跡を、『『本当のこと』探し(p.50)』、「神の探求(p.1)」、「真理探究(p.6)」、「何か(=神)」を見つけること(p.93)などとそれぞれ呼んでいるが、これらの表現は、彼らのそれまでの人生の軌跡と同一線上にイスラームへの入信を位置づける見方であると言えよう。

以上では、日本ムスリム協会・青年部発行の『入信記』を例に、幾名かの執筆者の言葉を紹介した。これらの叙述は、イスラームへの新たな入信者たちが、体系や制度としてのイスラームではなく、個人的な帰依の態度としてのイスラームを語っていることを示している。もちろん、改宗ムスリムの入信の語りの特徴をもってして、それを「イスラーム」を巡る意味解釈の世界的傾向と断定することは決してできない。しかし、今や非ムスリム諸国に居住するムスリムが世界の全ムスリム人口の三分の一を占めるという事実、また、現代のムスリムが帰属意識を持つ「ウンマ(イスラーム共同体)」の実態が、前近代に比べますます象徴的でグローバル化された意味に変容しつつあるという有効な仮説²⁸を考慮すれば、非ムスリム諸国においてイスラームへ入信する改宗者という存在は、現代のムスリムの宗教性(religiosity)を査定する際の肝要な要素のひとつと成り得ることは確

かだ。そして、彼らの入信体験の語りは世界的規模で広範囲に拡大している現象であり、すでに見てきた通り、その言論内容は非常に特徴的である。このことは少なくとも、現代のムスリムの意識の中に、われわれが「動名詞的イスラーム」と名付けたところのものが萌芽し始めているということのひとつの範例として認識することができるのではないだろうか。

V. おわりに — ポストモダンにおけるイスラーム —

以上で、「イスラーム」という言葉の使用法に関する現代的傾向についての一考察を行った。われわれは、制度的宗教、体系的な教義としてのイスラームを「固有名詞的イスラーム」、信徒個人の服従・帰依の経験、態度としてのイスラームを「動名詞的イスラーム」と呼び区分したが、私見ではこの二つの「イスラーム」の使用法は、およそ以下のような史的展開を迎えた。

まず、イスラーム初期において両者はほとんど区別されず、渾然として使用されていた。しかし、近代化とともに制度的なイスラームの記述が要求され、一定の「射程」「範囲」を備えた統体(entity)としてのイスラーム、つまり、「固有名詞的イスラーム」の使用が支配的なものとなっていった。しかし今日、一部のムスリムの間に「動名詞的イスラーム」へと回帰する兆候が見うけられる。本稿では、そのもっとも顕著な事例として、イスラームへ新たに改宗した入信者によって語られる種々の入信記を取り上げた。

入信記の語りの中からは、「イスラーム」という言葉を、制度的宗教あるいは教義の体系としてではなく、信徒一人ひとりの個別的な服従・帰依の経験、態度として認識していることを示す多くの記述を見出すことが可能である。入信体験を語る信徒の多くは、彼ら自身の個人史やイスラームとの出会いを語ることによって、教義の内容を語ることなしに、「イスラーム」の真理性を他者(非ムスリム)に伝達することが可能だと信じている。また少なからぬ改宗者は、入信の際にイスラームの教義の内容にさほどの関心を払っていなかったこと自覚的に語っている。

この事態を、宗教の対象領域の縮減としての「私事化」の一例として理解することは、一定の妥当性を持っていると思われる。しかし、ここではより踏み込んだ解釈の可能性を指示することで本稿を終えたい。

ある者が、自身の宗教を選択するとき、その宗教に特徴的な諸概念間の論理的・体系的な整合性を問わないという事態は、彼らが本来的に「小さな物語(micro-narrative)」²⁹の中で生きており、その枠組みの中で宗教の意味付けを行っていることを示唆している。つまり、「固有名詞的イスラームから動名詞的イスラームへの回帰」という現象は、制度化されたシステムの正当性については黙し、

個人の生活世界における概念の意味(=有用性)のみが問われ、真理の正当性の語り局所的なレベルへと移行している点において、ジャン・フランソワ・リオタール(Jean-Francois Lyotard, d.1998)が定義したような意味でのポストモダニズムの現象のひとつとして認識することが可能だ。

リオタールによれば、現代は、未来に実現すべき「理念」を正当化根拠に、人類の「解放」を推進する全体主義的なプロジェクト、すなわち「大きな物語(the Great-narrative)」が立ち行かなくなった歴史的段階にある³⁰。イスラームでも同様に、政治的なレベルで実体を持つ信仰共同体が消滅し、「人類を人間の崇拝から救い神の崇拝へと導く」というイスラームの伝統的大儀が、あらゆる局面において現実味を失っている。この意味においては、イスラームは確かにポストモダニズム的状况の只中にあると言える。「小さな物語」を生きる信徒たちによって、概念の意味がそのような生のかたち適合するよう、読み換えられているのである。

社会的・政治的な環境の変化は、不可避的に、理念的概念の意味に対しても何らかの影響を与える。本稿ではその例として、「イスラーム」という言葉の現代的語用論に焦点を絞った。今後は、イスラームという宗教を考える上で避けて通れないさまざまな概念が今まさに経験している意味的変容を追うことで、理論的な側面におけるイスラームの構造的変容について、考察を深めていきたいと考えている。

註

- ¹ Olivier Roy, *Globalized Islam: The Search for a New Ummah*, Columbia, 2004, p. 38.
- ² これらの概念の意味は後述する。
- ³ イスラームの多義性に関する議論一般については、「特集／私のイスラーム、あなたのイスラーム」『アジ研ワールド・トレンド』58(2)、アジア経済研究所、2002年、1-31頁、中田考「宗教学とイスラーム研究」『宗教研究』341号、2004年、25-52頁等参照。
- ⁴ 本稿におけるクルアーンの引用は基本的に日本ムスリム協会『日垂対訳・注解聖クルアーン』2009年に依った。
- ⁵ ‘Abdullāh bnAḥmad bn Maḥmūd al-Nasafī, *Madārik al-Tanzīl wa Ḥaqā'iq al-Ta'wīl*, Beirut, Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah, vol. 2, p. 588.
- ⁶ 日本ムスリム協会『日訳サヒーフムスリム』第1巻、2001年、28頁。
- ⁷ クルアーンにおける「宗旨(al-dīn)」の概念については、澤井真「井筒俊彦のクルアーン解釈における“dīn”の概念」『文化』72(3/4)、東北大学文学会、2009年、157-171頁参照。
- ⁸ 大塚和夫『イスラーム的 — 世界化時代の中で』日本放送出版協会、2000年。
- ⁹ Wilfred Cantwell Smith, *On Understanding Islam: Selected Studies* (Netherlands, Mouton Publishers, 1981), p. 55.

-
- ¹⁰ Cf., Wilfred Cantwell Smith, *On Understanding Islam*, p. 47; Liyakat Takim, “Revivalism or Reformation: The Reinterpretation of Islamic Law in Modern Times,” in *The American Journal of Islamic Social Science*, 25(3), 2008, pp. 75-78.
- ¹¹ この問題領域については、タラル・アサド、中村圭志訳『宗教の系譜 — キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』岩波書店、2004年も参照。
- ¹² Dale. F. Eickelman and James Piscatori, *Muslim Politics* (Princeton, Princeton University Press, 1996), p. 38.
- ¹³ この点については、例えば拙稿 Matsuyama Yohei “The Japanese People and Islam,” in *Islam and Civilisational Renewal*, 1(4), International Institute of Islamic Studies Malaysia, 2010, pp. 710-712 参照。
- ¹⁴ Islam for Today, “Converts to Islam” (Retrieved 9 June 2010 from <http://www.islamfortoday.com/converts.htm>)
- ¹⁵ 例えば <http://www.youtube.com/watch?v=UH3Zqq1df-g&feature=related> を参照。
- ¹⁶ http://www.youtube.com/watch?v=aoU_fjCfCxl&feature=related (Retrieved 8 June 2010). 傍点引用者。
- ¹⁷ <http://www.youtube.com/watch?v=wvYZ1p-lCSc&feature=related> (Retrieved 5 July 2010). なお、「Dakwa(ダクワ)」は「布教」の意味を持つアラビア語の da‘wah がマレー・インドネシア語に流入し訛ったものである。
- ¹⁸ 以上の論点に関して、「グローバル化・ポストモダン化の中での日本人ムスリムの入信体験の語りを問題にするのであれば、それ以前の日本人ムスリムの入信体験記と比較するべきではないか」という疑問が呈されるかもしれない。しかし、以上の議論における筆者の意図は、プレモダンとポストモダンの入信記の語りの相違点を指摘することではなく、現代において増加しているところの、入信記を公的に発信するという行為自体、及び、それをデアワに結びつける思考そのものの特異性を指摘することであった。実際、前近代においては「入信記」なるものは殆ど執筆されなかった上に、一般信徒の個人的体験の語り、他者の入信への契機となるなどという思考は存在しなかったのである。
- ¹⁹ もちろんここで扱うことは本稿の主題に関連する極めて限定的な側面であり、彼らのイスラーム観・宗教観の全体像を抽出するつもりはない。日本ムスリム協会(<http://muslimkyoukai.jp/>)は、東京都渋谷区に本部事務所を持つイスラーム団体であり、会員の多数は日本国籍を持つムスリム。政治色を排し、特定の指導者を仰がないことを団体の指針としている。『入信記』を発行している当協会青年部は、40歳未満の任意の協会会員によって構成される。
- ²⁰ 日本ムスリム協会青年部『入信記』日本ムスリム協会、2007年、33頁。
- ²¹ 日本ムスリム協会青年部『入信記』44頁。
- ²² 日本ムスリム協会青年部『入信記』27頁。
- ²³ 日本ムスリム協会青年部『入信記』27頁。
- ²⁴ 日本ムスリム協会青年部『入信記』46頁。
- ²⁵ 日本ムスリム協会青年部『入信記』80頁。

-
- ²⁶ ここでは、法システム論における「指針」の概念を援用している。つまり、法システム論における「指針」とは、「決定を得るにあたってある要因が重要か重要でないかという問題」に関する、一種の「補助規範」として説明されるものであり、普遍的体系や個々の個別的判断を、絶対的に決定する基準ではない。T. エックホフ、／N. K. ズンドビー、『法システム — 法理論へのアプローチ —』都築廣巳・野崎和義・服部高広・松村格訳、ミネルヴァ書房、1997年、100-101頁参照。
- ²⁷ 森本は、回心を「強化的回心」と「転換的回心」に分類する。「強化的回心」とは、以前から持っていた信仰体系の補強、合理化を意味し、「転換的回心」とは、信仰体系の根本的な改変を意味する。森本清美『現代社会の民衆と宗教』評論社、1975年、23頁参照。
- ²⁸ グローバル化された「ウンマ」の概念については、Olivier Roy, *Globalized Islam* を参照。中世において「ウンマ」は、少なくとも理念上は、信仰共同体(すなわちチャーチ)であると同時に、統一の法規範に治される法共同体であり、統一の政治的意思を有する政治的共同体でもあった。信徒は、定めぬ喜捨(ザカー)の支払いや従軍によって、ウンマに身体的なレベルで「帰属」していた。しかし今日、ウンマは物理的実体を失い、意識的なレベルで「帰属意識」を持つ想像上の産物となったのである。
- ²⁹ 「小さな物語」とは、局所的な正当性しかもち得ない物語、他に対して自己の優位を訴えることができない断片的な物語である。ジャン＝フランソワ・リオタール、菅啓次郎訳『こどもたちに語るポストモダン』筑摩書房、2007年参照。
- ³⁰ ジャン＝フランソワ・リオタール、小林康夫訳『ポストモダンの条件 — 知・社会・言語ゲーム』書肆風の薔薇、1989年、リオタール『こどもたちに語るポストモダン』参照。

The Contemporary Usage of “Islam” : A Shift toward “*islām* as Gerund” in the Conversion Stories

Yohei Matsuyama

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Abstract :

This paper discusses how the contemporary meaning of the term “*islām*” is shifting from “*islām* as a proper noun” toward “*islām* as a gerund.” The discussion is based on narratives by Muslims who converted to Islam, particularly those on records of Japanese who became Muslims. The author uses the phrase “*islām* as a proper noun” to refer to Islam as an institutionalized system, whereas the phrase “*islām* as gerund” to refer to a private attitude of submission to God maintained by each believer.

During the founding period of Islam, these two dimensions of *islām* were not wholly separate. Through a period of extensive modernization, however, “*islām* as a proper noun” achieved the dominant position as proper usage, largely through an urgent need to define “the religious” as a domain separate from the territory and authority of secular nation-states.

Although the modern usage of *islām* has leaned toward use as a proper noun, an increasing number of Muslims today use the word to describe a private attitude of submission. This trend is conspicuous in an abundance of conversion stories and among new Muslims who narrate their life stories in mass media for the purpose of *da'wah* (propagation) testifying to the truth of “Islam.” It must be noted that most of these conversion narratives are from lay persons who have little access to religious texts or knowledge of scholars’ tenets. However, they believe that the Truth or “Islam” can be conveyed to non Muslims through narration of their private experiences and feelings, not by detailing the creed of Islam. From this, it will be seen that Muslims today increasingly speak of *islām* as an individual attitude of submission rather than an institutionalized system.

Keywords : *islām*, objectification, conversion, truth, macro-narrative